四国中央市 歴史探訪

円空仏「観世音菩薩像」

四国の中央「宇摩」へ辿り着いた 中四国で唯一確認されている円空仏

円空仏の魅力

作者である円空〈寛永九年（1632）～元禄八年（1695）〉は、天台宗の僧侶であったとされ、修験者・遊行僧として全国各地を行脚しながら造像活動を行った人物です。出身の岐阜県（1000体以上）・愛知県（3000体）を中心に、北は北海道から南は奈良県に至るまで作品を残しました。

その数は生涯で12万体とも言われ、約5000体以上の現存が確認されています。人の背丈を越える物から手のひらサイズのものまで、木材を鉈で何等分かに断ち割り、その跡を活かしながら大小複数のノミを用いて像の頭から台座までを造り出しました。円空は従来の様式に捉われることの無い独創性を持ち、名も無き庶民の為の造仏聖として、今も昔も全国で多くの人をひきつけています。

つながれた祈りの形

円空が四国を巡ったかどうかは定かではありませんが、本像は元々、山田観音堂（市内土居町小林、現在は廃寺）で他の仏像と共に半ば放置されていました。本像の背銘を見ると、胎蔵界大日如来三種真言が書かれていることから、貞享年間（1684～）以降の作品と判断されていますが、その由来を含め多くが判然としていません。

観音堂は本尊の十一面観音の鏡から堂の柱に至るまで散逸することとなりましたが、明治六年（1873）頃、安藤正楽〈慶応二年（1866）～昭和二十八年（1953）政治家・思想家〉が観音堂の僧に頼み込み、貰い受けたことが、継承のきっかけとなります。ただし、正式に円空仏として認知されるのは昭和四十年代を待たねばなりませんでした。

本像が現地造作でなければ、山田観音堂へはどのようにして持ち込まれたのでしょうか。彫り跡に妙味を感じさせる円空仏の中では、全体的に角が幾分丸みを帯びたようにも見えます。全高16・3㌢の小像であり、携行されて移動する可能性は十分ありますし、長い年月をかけて信仰心から撫でられ続けた結果と見る事もできます。円空が意図した像の移動（例えば、石鎚や四国へ向かう修験者に託されたなど）であったかどうか知る術はないものの、多くの機会と縁により、時代を越えてつながれた祈りの形をここに見る事ができるのです。

廃寺となった山田観音堂の跡地

市内には、円空と並んで有名な造仏聖であった木喰の作品も2体残されています。両方が伝わる市町は西日本ではおそらく唯一。多くの人・物が往来したであろう四国の中央「宇摩」がつないだ祈りの形を後世にも伝えていきたいものです。

特別展のお知らせ

「宇摩の祈り－あんなかたち・こんなカタチ－」展

今回ご紹介した円空仏のほか、県内では本市にのみ残る木喰仏、石造の女神坐像、紀州藩主御生母となった永隆院の持念仏類など、時代を越えてつながれた庶民信仰のさまざまな形を貴重な資料で紹介しています。

「実物に勝るものなし！」

ぜひご来館ください。

開催期間…5月16日（日）まで

TEL 28-6260（ファクス兼） 入館無料

休館日…毎週月曜・祝日の翌日・年末年始

開館時間…9：00～17：00（最終入館 16：30）

「ホンモノ」にであえる場所

いつも新しい発見がある博物館

四国中央市 歴史考古博物館
Museum of History and Archaeology at Shikokuchuo City
-高原ミュージアム-